副助詞クライの程度用法

—評価を軸としないクライの分類について—

1LT14129K　松尾結花

1. 問題提起

副助詞クライについて、丹羽（1992）や丸山（2001）、田中（2003）、須川（2006）などのこれまでの文献では、評価に言及した分類が多く行われてきた。

例えば丹羽（1992）では副助詞クライについて以下のような分類を行っている。

(1)　**丹羽（1992）のクライの分類**

〈高程度〉透き通るクライ色が白い。 [丹羽 1992:1122, (1a)]

〈低程度〉効用と言えば、せいぜい人に安心感を与えるクライだ。 [丹羽 1992: 1123, (6a)]

〈適当程度〉病気しないクライに頑張りなさい。 [丹羽 1992: 1123, (7a)]

〈同程度〉 君は今、トルコ東部の住民と同じクライにこの国を理解したわけだが、それで以前より幸せになったとは言えないだろう。 [丹羽 1992: 1124, (8a)]

〈不定程度〉どれクライのものなんだろう？ [丹羽 1992: 1124, (9a)]

〈概量〉 十分クライ待った。 [丹羽 1992: 1125, (10a)]

〈例示〉 軽井沢グライで遊びたいね。 [丹羽 1992: 1125, (12a)]

〈最低限の例示〉散歩グライしたらどうだ。 [丹羽 1992: 1126, (13a)]

しかしながら、このような評価を軸とした分類では、以下のような問題が見られる。まず、次の例文は、丹羽（1992）ではどちらも〈高程度〉に分類されるものである。

(2)　明らかに異なるタイプのものが同じ分類となっているもの

a.　鯨クライもある大きなセイウチが発見された。[丹羽 1992: 1122, (1c)]

b.　透き通るクライ色が白い。[丹羽 1992: 1122, (1a)]

しかし、(2a)からは、そのセイウチの大きさが鯨とほぼ同じである、という推論が成り立つのに対して、(2b)からは、その人の肌が透き通っている、という推論は成り立たない。このように明らかに異なるタイプのものが同じ分類になっているのは不適切である。

また、次の 2 つの例文は、丹羽（1992）では(3a)は〈高程度〉、(3b)は〈同程度〉と別々の用法に分類されている。

(3)　同じタイプのものが異なる分類となっているもの

a.　鯨クライもある大きなセイウチが発見された。[丹羽 1992: 1122, (1c)]

b.　前回クライの記録がでれば十分だ。[丹羽 1992: 1124, (8b)]

しかしそれぞれセイウチの大きさが鯨と同等、記録が前回と同等であることを表しており、どちらも程度の表し方自体は同じである。

このように分類がクライの意味に沿っていないのは、評価というものを分類の軸に立てているためではないだろうか。

(4)　問題：

クライの分類を行う際、本当に評価に言及しなければならないのか？

2. クライの分類

本論文ではあえて評価に言及せず、クライの分類を行った。本論文で主張する分類は以下

のようなものである。

(5) **本論文で主張するクライの分類**

〈概量／値指示用法〉林道の終点三十メートルクライ手前に、林道から右に入る道がある。

〈スケール極限値用法〉透き通るクライ色が白い。

〈結果状況用法〉誰もが飛び上がって驚くクライ迫力のある映像。

〈最低限の例示〉散歩グライしたらどうだ。

2.1. 概量／値指示用法

〈概量／値指示用法〉とは、「おおよそ～」「だいたい～」という概量を表す用法である。

(6) a. 林道の終点三十メートルクライ手前に、林道から右に入る道がある。
b. 二年クライ勉強をするつもりで行ってきたらどうか。
c. 課題は明後日クライで終わるはずだ。
d. 見る物全てが夕張と同じクライ汚い。
e. 一国の国家予算に匹敵するクライのカネを動かす。
f. 先日の祭クライの賑わい。

本論文では〈概量／値指示用法〉でまとめているが、丹羽（1992）では評価によって分類しているため、これらは 6 つの用法に散らばっている。

(7) a. 鯨クライもある大きなセイウチが発見された。〈高程度〉[丹羽 1992: 1122, (1c)]
b. 小学生の小遣いにも満たないクライの金額。〈低程度〉
c. 君は今、トルコ東部の住民と同じクライにこの国を理解したわけだが、それで以前より幸せになったとは言えないだろう。〈同程度〉[丹羽 1992: 1124, (8a)]
d. どのクライ来ているの？〈不定程度〉[丹羽 1992: 1124, (9b)]
e. 十分クライ待った。〈概量〉[丹羽 1992: 1125, (10a)]
f. 木曜日クライから始めよう。〈例示〉[丹羽 1992: 1125, (12c)]

2.2. スケール極限値用法

〈スケール極限値用法〉とは、P クライ Q という形の文において、Q についてどのようなスケールを取るか P でスケールの端を示し、Q の値がそのスケールにおいて高い度合いに達していることを示すものである。丹羽（1992）では他の高い程度を表す文と共に〈高程度〉にまとめられている。

(8) a. 透き通るクライ色が白い。[丹羽 1992: 1122, (1a)]
b. 見えないクライ小さくする。
c. 体が燃えるクライに熱い。

2.3. 結果状況用法

〈結果状況用法〉とは、P クライ Q という形の文において、Q の結果として P という状況が生じることを述べ、それによって聞き手に Q の値を推測させるものである。

(9) a. 誰もが飛び上がって驚くクライ迫力のある映像。
b. 山小屋の粗末きわまりない食事も苦にならないクライ、日の出は素晴らしかった。
c. 私は声をかけにくいグライ硬い表情をしているだろう。
d. 雪がかなり積もっていて、途中断念した方が無難かなとまで思ったクライだった。
e. フィンランド大使館の人に調べてもらいたいクライの傑作。

本論文では〈結果状況用法〉という一つの用法にまとめているが、丹羽（1992）では評価によって分類が行われているため、3 つの分類に散らばっている。

(10) a. その焚き火の勢いは、こっちにまで飛火して火事になるんじゃないかと思ったクライだった。〈高程度〉
b. 効用と言えば、せいぜい人に安心感を与えるクライだ。〈低程度〉[丹羽 1992: 1123, (6a)]
c. 病気しないクライに頑張りなさい。〈適当程度〉[丹羽 1992: 1123, (7a)]

2.4. 最低限の例示

〈最低限の例示〉とは、クライの前節要素へ低い評価を与える用法である。丹羽（1992）における〈最低限の例示〉の用法とほとんど変わらない。

(11) a. 散歩グライしたらどうだ。[丹羽 1992: 1126, (13a)]
b. 訂正グライできる。[丹羽 1992: 1126, (13b)]
c. 映画にクライ行ったけど。[丹羽 1992: 1126, (13c)]
d. この映像を見て泣かなかったのは君クライだよ。

この用法では、クライをなくすと文の意味が変わってくる。

(12) a. 散歩したらどうだ。
≠散歩グライしたらどうだ。
b. 訂正できる。
≠訂正グライできる。
c. 映画に行ったけど。
≠映画にクライ行ったけど。
d. この映像を見て泣かなかったのは君だよ。
≠この映像を見て泣かなかったのは君クライだよ。

3. まとめ

これまでの文献では評価に言及したクライの分類が行われてきたが、本論文では、評価を軸としない方がクライの機能に沿った分類が可能であると示した。

4. 参照文献

須川友美（2006）「日本語の程度をあらわす助詞について ～ホド、クライの意味と用法～」卒業論文, 九州大学.
田中聡子（2003）「「くらい」の意味的特徴 -「ほど」との比較を中心に -」『言葉と文化』4: 277-292.
丹羽哲也（1992）「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要, 44(13): 1115-1150.
丸山直子（2001）「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、いわゆる〈程度用法〉と〈とりたて用法〉(室伏信助教授記念号)」『日本文學』95: 141-162.